私のネクストステージ
―退職者への質問状― Vol.48

「こぎん刺し」の魅力を発信し、次世代に伝えたくて私設の展示館をオープン

元弘前市職員
佐藤 陽子さん（73歳） 2010年定年退職

【さとう・ようこ】1949年弘前市（旧岩木町）出身。1968年に旧岩木町職員として採用され、総務課に36年間、議会事務局に2年間勤務。2006年市町村合併により弘前市職員となり、2010年弘前市東部学校給食センター所長を最後に定年退職。同年7月、自宅の一部を改装し「佐藤陽子こぎん展示館」を開館。こぎん刺しの歴史説明と併せ、古作こぎん及び自身の作品を展示している。2019年には『津軽こぎん刺し図案集～高橋寛子天からのおくりもの～』を刊行。

――佐藤さんは定年後、地元津軽に伝わる「こぎん刺し」の展示館をオープンされたそうですが、定年後のライフプランについては、いつ頃から描かれていたのですか。

私は楽観的な性格ということもあり、現役時代、定年後のことは全く考えていませんでした。漠然と「定年したら自分の時間が増えるだろうから、まずは習い事と旅行、それに好きなこぎん刺しをやろう」と構想していた程度です。

ただ、こぎん刺しについては、20歳の時、独学で始めて以来ずっと趣味で続けており、その歴史にも興味を持っていたので、定年後は色々調べたりしながら深く知る時間がとれると楽しみにしていました。

――こぎん刺しにはどのような歴史があるのでしょうか。

衣服の強度を高めたり保温するため布を重ねて糸で刺すことを「刺し子」と言いますが、こぎん刺しはその技法の一種です。

北国・津軽は寒冷地で綿花が育たなかった上、北前船や近江商人から入手した貴重な綿は藩で使われ、農民の多くは麻布の着用しか許されませんでした。目の粗い麻布は極寒の津軽では到底冬を凌ぐことはできませんし、過酷な労働にも耐えられません。農民たちは布の強度と保温性を高めるため刺し子をほどこし、そこからいつの間にか美しい模様が生まれ、こぎん刺しという技法へ発展していきました。

――厳しい環境の中で、農民たちの工夫から生まれた刺し子の技法が、こぎん刺しなのですね。現在はどのような状況ですか。

こぎん刺しをほどこした布は、近年まで汚れた野良着としてのイメージが強く、地元では全く価値のないゴミ同然の扱いで、土蔵の片隅に置かれるような状況でした。ですが、SNSを活用してその魅力が発信されたことをきっかけに世界から注目され始め、地元でも改めて価値が見直されるようになりました。糸を刺して創り出される文様は多彩で、土産品として人気です。

こぎん刺しは特別な道具や技術を必要とせず、布と糸、針さえあれば地域や年齢、性別に関係なく誰でも手軽に始めることができます。そのため、趣味の手芸としての人気も高まっています。インターネットの動画で誰かがこぎん刺しをしている様子を見て、「自分も始めてみたいな」と思う人がいるのでしょう。今では津軽から日本全国、世界へと羽ばたいています。

――佐藤さんご自身は、こぎん刺しの技術をいつ、どのようにして習得されたのですか。

津軽ではこぎん刺しがあまりにも身近過ぎるので、教室や講座があっても申し込む人は少ないと思います。私もしばらくは一人でこぎん刺しをしていました。

ですが、第一人者であり長年こぎん刺しの振興に力をそそがれていた前田セツ先生が教室で教えられていることを知り、

古い図案と新しい図案を融合させた作品の一枚

斬新な模様で構成されている津軽こぎん刺しの図案を取りまとめて刊行した『津軽こぎん刺し図案集～高橋寛子天からのおくりもの～』

「佐藤陽子こぎん展示館」の概要

【展示館面積】約52.96㎡
【展示内容】明治時代に制作された古作こぎん刺し20点、古作菱刺し４点、自身の作品約200点、こぎん刺し関連書籍約80冊
【来館者数】開館からコロナ禍による休館までの９年間で約６000人（延べ人数）
【その他】ワークショップの開催、展示館オリジナルのこぎん糸・こぎん用布・こぎんグッズ・作品の販売
【URL】http://youko-kogintenjikan.com/

毎月2回、通うようになりました。

教室では特に技術的な指導はなく、先生が考案されたカリキュラムを淡々とこなし、自分の作品を制作しながら、展示会がある時にはお手伝いをしていました。先生が各種講座で指導される際には助手を務めることもあり、それを傍で拝見することで自身の知識としていました。さらに、前田先生以外の先生にも師事し、技術を習得していきました。

――その後、「佐藤陽子こぎん展示館」をオープンされていますが、いつ、どのような経緯でそのような運びになったのですか。

定年から4カ月後の２０１０年7月、自宅の一部を改装してオープンしました。きっかけは、田中忠三郎先生からご要望があったことです。青森・下北出身の民俗学者である田中先生は布文化の研究もされていて、以前から「こぎん刺しの素晴らしさを発信するためには、発祥地である津軽に展示館を開館すべきだ」とおっしゃっていました。その話に賛同した私は先生からこぎん刺しの古い作品を譲り受け、それらを展示する場として展示館をオープンさせました。

――展示でこだわられていることは何ですか。

私は以前から古いこぎん刺しを見るため各地の美術館や博物館、各種展示会に出かけていたのですが、どこへ行っても直接手で触れることはできませんでした。どんな刺し方をしているのかを確認するため布の裏を見たくても、それが叶わず、何度も歯がゆい思いをしました。

来館者にそのような悔しい想いだけはしてほしくないので、自分の展示館では作品に手で触れて、着用できるようにし、こぎん刺しの野良着が必需品だった時代にタイムスリップしていただいています。

――どんな時にやりがいを感じられますか。

私は、一人でも多くの方にこぎん刺しの楽しさを知っていただきたいと思っています。こぎん刺しを知らずにお越しくださるお客さまもいらっしゃいますが、そのほとんどの方が、鑑賞後「自分もこぎん刺しをやってみたい」と言ってくださいます。そんな時、材料一式をプレゼントして、その後もこぎん刺しを続けているとのご報告を受けると感動して、「展示館を始めてよかった」とやりがいを感じます。

――運営で大変なことはどんなことですか。

事前予約制で、予約があった時のみ開館していますが、自宅で一人で対応しているため一度に多くの人数を受け入れることができません。せっかく興味を持っていただいたのにお断りしなければならない時には、申し訳ないと思います。

――展示館運営以外でこぎん刺しに関連する活動はされていますか。

現在、全国各地からこぎん刺しに関する講演とワークショップ、作品展示会のご依頼をいただいており、出来る限り要請に応えたいと思っています。

――今後やりたいことはありますか。

可能な限り全国各地に出向いて、ＳＮＳでは発信できないこぎん刺しの〝空気〟を皆さんにお伝えしたいです。同時に、これまで収集してきたこぎん刺し関連の資料を整理し、次の世代に伝えていきたいと思っています。とは言え、退職後すぐに展示館を開館して多忙な日々が続いたので、のんびり旅をしたいという気持ちもあります。

――最後に、30代～50代の読者へ向けてメッセージをお願いします。

江戸時代の僧侶で歌人だった良寛和尚の辞世の句に「散る桜　残る桜も　散る桜」がありますが、今どんなに美しくきれいに咲いている桜でもいつか必ず散る時は来ます。限られた命の中で充実した日々を送り、悔いの残らない人生でありますように。